

公報

○太政官達第六十四號
右相連候事
明治十八年十二月二十二日
司法省達丁第三十八號
今般督史館中副總裁ヲ置キ明治十四年(十二月)第
號令制中左ノ一項ヲ追加
副總裁
一員
職掌總裁ニ亞ク

司法省告示甲第十三號
明治十六年十二月二十二日
司法卿山田顯義
秋田始審裁判所管内大館治安裁判所來明治十七年一月四
日より開廳ス
右告示候事
心得此旨相違候事

明治十六年十月廿四日	馬場 足立 江澤 栗原 大竹 斐田	政行 直躬 春行 續 康造 八東
明治十六年十一月二日	海軍少機關士 海軍機關士補	
明治十六年十一月五日	海軍中機關士從七位	
海軍大機關士		
海軍中尉		
海軍少尉正八位		
海軍少尉正八位		

明治十六年十一月八日	同	大井上久磨
島根縣周吉穩地海士知夫郡長		
明治十六年十一月九日		
海軍中佐		
步兵少尉		
明治十六年十二月八日		
三等軍醫		
明治十六年十二月十日		
海軍中佐正六位勳五等		
海軍大佐		
末川 入波		

南事件ニ關ニ支那ト佛國西ノ葛麻ハ本年三四月ノ實	支那ト佛國西ノ喧嘩	十六年十二月十八日
式部卿七等出仕兼任四等掌典	宮内権少書記官正七位勳六等	長崎省吾
明治十六年十二月廿一日	内務大書記官從五位	西村捨三
任別事兼沖繩縣 外務権少書記官	内務大書記官兼 沖繩縣令從五位	西村捨三
外務書記官正七位	高平小五郎	

リ漸ク世人ノ注意ヲ喚起シ東西人ノ眼睛ヘ其焦点北京
海ノ使臣會合談判ニ巴厘ノ回答ニ^{トラン}東京ノ戰爭ニ致ニ此
集合シテ其結果如何ナ侍ナタル甲斐モナク明治十六年
將サニ幕ントスル今日ニ至リマア和戰如何ノ難程未シ

卷之三

抑モ此葛麻ノ原因ハ何レニ在ルヤト問フニ近年佛國西ガ
大ニ其勢力ヲ安南地方ニ振ヒ其所領サイゴン一帯ノ地ナ
根據トシテ漸ク其勢境ニ迫リ千八百七十四年ニ安南國ト
條約ヲ結ビテ同國ヲ佛國西共和國ノ保護國ト爲シ宵ホ通
ミテ支那ノ雲貴兩廣諸省ニ近接スル東京地方ヲ略取スル
ノ方略ニ實行シ紅河ノ三角地海岸ノ各要衝ニハ既ニ其地
歩チ固クスルナ得タルナ以テ更ニ河流ヲ湖リテ雲南ニ入
ルノ路ヲ開カントシテ遠征軍ヲ派遣シ土族黒旗兵等ト相
攻戰スルニ至ルニ及ビテ支那政府ハ大ニ自カラ懼ム所
ヲ知リ先ツ軍兵ヲ雲貴ノ南境ニ屯セシメテ佛軍北上ノ
路ヲ扼シ同時ニ雲南爲中國所屬之邦ノ議論ヲ提出シテ佛
國人ガ狼ニコ他國ノ領地ヲ侵略スルナ責メ居ノ未タ亡ビ
ザルニ及ビテ齒ノ寒カラザランノ用意ニ済々タリシナ
リ其結果ハ北京ニテ佛國アーリー公使トノ談判ト爲リ巴
里ニテ曾紀澤公使ノ詰難討論ト爲リ上海コテ李鴻章トト
リクニ公使トノ會合トナリ今日又巴里倫敦ニ於テ曾公使
ノ周旋應答トナリタルナリコレヲ簡略ニ云ヘバ今回ノ葛
麻ニ關シ佛國ハ被告ノ地位ニ立ナテ支那ハ原告ノ地位ニ
立ツモノナリ支那ヘ勵キ措カノ地位ニ在リテ佛國ハ受ケ
身ノ地位ニ在ルモノナリ故ニ支那ニシテ後ニ退カソカ
此葛麻ハ即坐ニ冰解スベシ前ニ進マンカ佛國ハ兵力ナシ
ヲコレコ抗シ一戰直チ其曲直ヲ決断スルカ或ニ諭テ支
那ノ命令ヲ聽キ旗を卷キテ西ニ歸ルカ二者其ニ居ラザ
ルベカラズ事局ノ落着甚ダ速カナリト云フベシ然ルニ支
那政府ノ率驥ノ緩慢ナル進ムガ如ク退クガ如ク到底兵力
ニ訴ヘテ曲直ヲ斷セントノ決心アルガ如ク又ナキガ如ク
我々傍観人ニハ其意中毫モ窺ヒ知ルベカラズ思フニ當局
ノ佛國人ト離ニ其對敵ノ意中ヲ測リ得ザルノ一事ハ我々
ニ比シテ格別ノ相違ナカルベキカ又顧ミテ佛國政府ノ舉
動ヲ見ルモ十分ノ定見アリテ東京侵略有從事スルモノハ
如クニモ思ハレザル意味ナシニアラズ是等ハ歐洲内部ノ
政略ニ忙ハシク左右ナ顧盼シテ安心ノ地位ヲ見出サマル
ニ佛國政府ハ敵ニ對シテ尙本能ク其地位ヲ維持シ曾公
使ノ辨辭諭詰ノ如キハ馬耳東風聞カザル眞似ナ爲シテ毫
モ省スル所ナク或ハ三千ナリ六千ナリ時々援軍ヲ派遣シ
テ紅河沿岸ノ要衝ヲ扼守シ唯其過歩コソヤア急速ナラ
サレ一步々々前ニ進行シテ更ニ退去シントスルノ形跡ナ
キナリ畢竟スルニ佛國政府ハ支那政府ノ百難千詰モ其實
ハ全クノ虚喝ナルヲ御見シテニレタ意ニ介セズ唯威成ル

（妙文一節）道中膝栗毛第六篇彌次喜多上方見物ノ様
借用シ清佛萬廉ノ現況ヲ形容スル左ノ如シ
（彌次）むしやうに人ダかけるい何だ、イヤ向ふは何かあるそうですさじいん人ざ、モシ～何でござれやすね（向より来る人）あこよゑらひなさうひだわる豆（北八）京の喧嘩珍しきらう足早に行て見るに怪物山は如く往來もあらぬ伸びなるふ二人は人と押分けられ見ゆれば彼の喧嘩の一人は着屋と見ゆててろに半身あせれしてあり相手は駆人體の男いづれも居強の若者ありされど都人の心もゆうらうかして喧嘩を見ゆれどさの三頭つぶたき合ひもせず日當りのよれ所を二人に向ひ合ひて（着屋）コレノわが三の方うち右行當りくさつててあひなどいふもんじやないわい己れ腦てんそやみてあそそかし（相手駆人）おきくされことなんぞ手の動くのによぢやあつとをして居やせんわい（着屋）云ひつ手拭を丁寧に折て鉢巻とせる（着屋）ようおどがひならすりよじやな、一体豆りや何所のもんじや（駆人）おれかい、おりや堀川筋ヶ小路下ル所じや（着屋）名は何と云ふぞ（駆人）喜兵衛と云ふ（着屋）年といつじや（駆人）廿四じやわい（着屋）おなづされ、已れ廿四にしらやゑらい若い、虚吉（おじよ）（駆人）おひいんぞ、ほんまじやわい、前厄で今年（駆人）命を死なしたわい（着屋）ろじやあわい、おりやわれある（駆人）イヤこちの一家じやさかい、れぬくさるやあろ、ゑひみさした（駆人）イヤそればうじやわい、乳番みくさるダきさがあるさかいゑひ難義な目に逢ふたわい（着屋）ろじやあわい、おりやわれある（駆人）イヤ（着屋）どうぬくさりやわれも若ひ（駆人）なら首傳してこまう（着屋）ねやじやわい、何のわれ（駆人）かいやい、あこに目くらで目の見えんす（駆人）伯と云ふ計督があろがな（着屋）オ、計督がありやうどうするや（駆人）イヤこちの一家じやさかい、れぬくさる（着屋）内は何所じやぞい（着屋）一條猪飼通を東へ入る所（駆人）やわい（駆人）かいやい、あこに目くらで目の見えんす（駆人）伯と云ふ計督があろがな（着屋）オ、計督がありやうどうするや（駆人）イヤ（着屋）どうぬくさりやわれも若ひ（駆人）なら首傳してこまう（着屋）ねやじやわい、何のわれ（駆人）かいやい（十兵衛）うしたら其お寄連れてこんせ、序（駆人）よ薄縁（おとこ）一枚くさんせんかね」又こちらの方に居る見物群下につくばい罷とねき（詞見なされ、あつちやのわろダさうしてあらじやつじやわい（見物）イヤ（駆人）やこちの男もあらじ頤（ひ）とやわい（見物）（おとこ）其闇傳（おとこ）の云はうすね、ゑらひのむはりじやな見物の人欠（け）（見物）ハイおかだじけある御座り升、とんと長いやうであつたダな昨日からもう悪くあつてツキタベ死があつたわい（見物）ソリヤお前樹憲（きげん）である、お葬禮（おめぐり）は（おとこ）お出せし居り升ぞじやあつたが、お

て戻るほどに夫達待つてと云つて待たして置きました
でいなと各氣の長い者をうらひう／＼として見物し
居ると彼の（職人の男）コリヤナイちらどこちへ寄り
され、日向がうさぎつて差なつたる（看屋）お、寄
つたゲビテモキや（職人）己れ今己れケことをわはと
ねクしておつたタ何で己れケアはまぢ（看屋）
はまやさういはまや（職人）何ぬかしくる、ま
う云ふされがほはまや（看屋）ナチやまほはま
（看屋）オ、されガ雲本リヤ己れモ貴び
（看屋）（職人）アヒよつと互にせり合ひて着物でも引
いたら飛ばやさかり、やめよしてこまうか（看屋）
ゑうい遅あつた、もういんでこす（職人）己れもお
がいにもさる遠方や既み建立しんでくよりわい、ハ
日はゑい天氣ちやつた（看屋）暖うてゑいわいやい
互に挨拶して此二人連立ちて歸る云々

此文軍ハ今ヨリ八十年前在テ上方人ノ喰煙ヲ形容シ
ルモノニシテ固ヨリ今日ニ其實例ナ見ルベキニアズバ
コレナ取テ十九世紀ノ最文明國人ガ片相手タニ清酒
鳥麻ニ形容セントスルハ甚タ難解ナルヲ無論ナリト羅
鬼角ニ目下ノ現況我輩ナシテ陳要毛ノ六篇目ナ思ヒ出
シメザラントスルモ能ハザルナリ俄ハ云フ支那或府ハ
底兵力ニ訴ルノ決意アリト雖ニ今日マテ未タ何等果斷
所置ナキハ一旦開戦ナ布告スルニ至レバ今日ノ佛國威宣
ハ東京鑿貢地方ノ小利害ナ争ヒ清酒ナ舉クテ大衆ノ慶祝
ナ叩クガ如キ捕策ナ謀用スル者コラズ必ズヤ直ナニコロ
津ニ飛來シア北京ノ象頭ナ攻撃スルナルベク左レバ日本
時天津河口ノ水合シ軍艦ノ駿入マ詎サマル日ヨリ至ラ
レバ愛心ナラズテ只管天津ノ閉河ナ待ナ居ル故ナ、天津
ト此說甚タ面白シ果シテ左様ノ軍略ナフニユハ天津ノ河
口モ今日頃ハ最早水合ノ季節ナルが故ニ清廷宣戰ノ報知
ソ府に於て人民より銀兩金三万八千兩度と受取るの際人
民ふ堅忍不拔を勧告し且つ愛國の御立は得て期すべきを
深く自信する旨を述べたり

○飼寄附 今般農田耕種社送信に付属名と以て金百圓ある
廿一日御寄附せられた

○廣東震電 本月七日のことか廣東府より支那人等一

増援するたる兵士

て戻るほどに夫達待つてと云つて待たして置きました
でいなと各氣の長い者をうらひう／＼として見物し
居ると彼の（職人の男）コリヤナイちらどこちへ寄り
され、日向がうさぎつて差なつたる（看屋）お、寄
つたゲビテモキや（職人）己れ今己れケことをわはと
ねクしておつたタ何で己れケアはまぢ（看屋）
はまやさういはまや（職人）何ぬかしくる、ま
う云ふされがほはまや（看屋）ナチやまほはま
（看屋）オ、されガ雲本リヤ己れモ貴び
（看屋）（職人）アヒよつと互にせり合ひて着物でも引
いたら飛ばやさかり、やめよしてこまうか（看屋）
ゑうい遅あつた、もういんでこす（職人）己れもお
がいにもさる遠方や既み建立しんでくよりわい、ハ
日はゑい天氣ちやつた（看屋）暖うてゑいわいやい
互に挨拶して此二人連立ちて歸る云々

此文軍ハ今ヨリ八十年前在テ上方人ノ喰煙ヲ形容シ
ルモノニシテ固ヨリ今日ニ其實例ナ見ルベキニアズバ
コレナ取テ十九世紀ノ最文明國人ガ片相手タニ清酒
鳥麻ニ形容セントスルハ甚タ難解ナルヲ無論ナリト羅
鬼角ニ目下ノ現況我輩ナシテ陳要毛ノ六篇目ナ思ヒ出
シメザラントスルモ能ハザルナリ俄ハ云フ支那或府ハ
底兵力ニ訴ルノ決意アリト雖ニ今日マテ未タ何等果斷
所置ナキハ一旦開戦ナ布告スルニ至レバ今日ノ佛國威宣
ハ東京鑿貢地方ノ小利害ナ争ヒ清酒ナ舉クテ大衆ノ慶祝
ナ叩クガ如キ捕策ナ謀用スル者コラズ必ズヤ直ナニコロ
津ニ飛來シア北京ノ象頭ナ攻撃スルナルベク左レバ日本
時天津河口ノ水合シ軍艦ノ駿入マ詎サマル日ヨリ至ラ
レバ愛心ナラズテ只管天津ノ閉河ナ待ナ居ル故ナ、天津
ト此說甚タ面白シ果シテ左様ノ軍略ナフニユハ天津ノ河
口モ今日頃ハ最早水合ノ季節ナルが故ニ清廷宣戰ノ報知
ソ府に於て人民より銀兩金三万八千兩度と受取るの際人
民ふ堅忍不拔を勧告し且つ愛國の御立は得て期すべきを
深く自信する旨を述べたり

○飼寄附 今般農田耕種社送信に付属名と以て金百圓ある
廿一日御寄附せられた

○廣東震電 本月七日のことか廣東府より支那人等一